

近況報告、そして今年の抱負

第3期 OB 熊谷 元

◆近況報告（仕事）

今回 OB・OG 会誌への寄稿に際して、頂戴致しました御題が「仕事と子育て」ということでしたので、まずは仕事についてご紹介したいと思います。

現在の仕事ですが、昨年7月より JR 東海から公益財団法人財務会計基準機構へ出向しています。そして当財団の企業会計基準委員会に所属し、現在はその委員会で研究員をしています。既にお気づきのとおり、私の業務はマーケティングとは全く関係のないところにありますが、世間的にはかなり注目されている内容であると自負していますので、簡単にその内容について説明します。金融資本市場のグローバル化が進展する中で、現在国際的な会計基準（IFRS）による世界中で利用可能な単一の会計基準の統一に向けた大きな流れがあり、日本の会計基準についても2015年もしくは2016年にIFRSをアドプション（強制適用）するか否かという議論がなされています。この議論は、会計関係者だけでなく、実際に会計基準を利用する経済・産業界でも大きな関心事となっていて、その関心事に対して、当委員会では仮にアドプションした場合に実務上どのような問題が発生するのか、また将来アドプションした際に利用者（投資家）・作成者（企業）に負担がかかりすぎるというのであれば、徐々にコンバージェンス（収斂）してはどうかという議論を日々行い、日本の会計基準を改訂するという作業を行っています。私が担当している分野でわかりやすいものを挙げると、BS（貸借対照表）やPL（損益計算書）を財政状態計算書や包括利益計算書という形式の異なる計算書に変えるというもので、簿記は当然のこととして、会計の概念など大枠を取り替える作業をしていると考えてもらえれば、何となく業務について理解してもらえるかと思います。もちろん、委員会は年長の公認会計士や学識者などで構成されていて、私は一研究員として日々勉強しているというのが実状です。

簿記が苦手だった学生時代に社会人になってこのような仕事をするとは考えてもいませんでしたが、今では会計について理解を深めるということは、社会人としての見識を深めることに直結していると強く感じています。グローバルな人材に求められるものとして、英語、会計、PCスキルということをよく耳にしますが、あながち間違っはけません。キャリアアップには当然+αも求められますが、有能な社会人はやはり高いリテラシーを持っているものです。

◆近況報告（子育て）

2008年に挙式・入籍を行いましたので、結婚して早3年ということになります。結婚式当日は人生最良の日であったと今でも思うのですが、3年経った今も理解のある妻と共に毎日楽しく過ごしています（妻はどう思っているかわかりませんが）。昨年2010年2月10日には待望の第一子が誕生しました。名前は、私の名前をとって、元希^{はるき}と命名しました。成長につれて親に似てくるもので、人見知りすることなくニコ



はるき
元希くん

ニコと愛想よく抱っこをおねだりする姿などを見ていると、やはり血は争えないと感慨深いものがあります。また今年2011年の梅雨の頃には第二子も誕生予定ということで、私が世のために果たすべきことは凡そ終了し、熊谷家もあくまで予定ですが、最終形を迎えることとなりそうです。

子どもをもって何か変わった？とよく聞かれますが、逆に聞きたいくらいです、父親になって何か変わりましたか、と。子育ては当然大変ですが、父親についていうならば、何か自分を変えてまですることはないというのが自分なりの結論です。子どもが生まれたとき、家族の中で、どこか自分は脇に置かれた感じがして、最初の数日か数週間で、自分にできることは、妻に休息が必要なときに手助けすることぐらいだと感じました。父親としてのアイデンティティーを見つけることや、子どもの誕生という未知の状況下で自分のできることを

見極めることの難しさを実感した瞬間でもありました。おそらく子どもが生まれたときに、父親と母親が遭遇する困難の中で一番明白な違いがここにはあって、子どもとの生物学的な関係、母性に対する社会通念から、母親の仕事は概念化されている一方で、父親の仕事というものは全くのフリーチョイスではないか。つまり、父親の役割はそのかなりの部分を、父親になったときに個人個人がそれぞれに決めればいいのか。そして自分なりに辿り着いた答えが、子どもを一家族として迎え入れたその時同様に、ごく当たり前のこととして、妻と子を見守ること。そして、漠然とでいいから子どもから、この親の子供として自分は幸せである、と思ってもらえる程度に父親らしいことを自分なりに考えてやってみる、そう考えるようになりました。少し達観した表現にはなってしまいましたが、これからも「自然体」で子育てを楽しみたいと思います。

◆良き一年を送るにあたって

新年早々に寄稿するということもあり、新年の抱負のようなことを書きますが、武田信玄の訓言にこうあります。「凡そ軍勝五分を以て上と為し、七分を以て中と為し、十分を以て下と為す。その故は、五分は^{はげみ}励を生じ、七分は^{なまけ}怠を生じ、十分は^{おごり}驕を生ずるがゆえ、たとえ我に十分の勝を得るとも、驕を生ずれば次には必ず敗るものなり。すべて戦いに限らず、世の中の事、此の心が肝要なり。」またシェークスピアは『リア王』の中で「もっとよくというあがきが、往々にしてすでによいことを台無しにし



初詣（著者は左）

てしまう」と言っています。日本にも「腹八分目」という言葉があります。

このように完全主義の積極的否定論は従前よりあるのですが、これを最近の自分の立場に置き換えて考えてみると、社会人としては「若手」カテゴリーから外れ、ある程度のパフォーマンスが求められる、世間的には妻子を持つ家長として責任ある行動が求められると、社会的に「求められる」ことが多くなりました。求められることによって、さまざまな到達点を自分の中で設定することとなります。理想をいえば、完璧と思われる到達点を目指すということになるのですが、たとえ完璧を望んだとしても、完璧にいかないことが多く、不満が残り、失敗感が募り、ついには意欲が減退して消極的になってしまう。がむしゃらに進んできた今までと違って、多少なりとも広がった視野で到達点に達するまでにこのような状況に陥ることが結構多いように感じます。いったん見切って先に進んだり、別のことに取り掛かったりする不完全主義が今こそ必要ではないか、そのように感じるわけです。とはいえ、不完全主義を全うする上で、「中途半端」「喰い散らかし」「詰めの甘さ」といった反論は避けられないでしょう。些細なこと含め、求められたことを仕上げる最終段階において自分に問いかけるべきは、理想の到達点に達していない、残された何か「詰めの甘さ」なのか「不必要な完全主義」なのか、まずは自分に委ねられたその判断を自分の責任のもと実践することが肝要なのだと思います。それを実践しなければ、前述した「自然体」ということを達成することは難しいわけで、今年は、判断を自分の責任のもと実践する、ということ意識したいと考えています。

…とはいえ、ごみ出しやおむつ替えは、判断云々ではなく、有無を言わず自分がしなければいけないわけで、それも広義の意味で「自然体」ということとして、今年もしっかり頑張りたいと思います。笑



沖縄旅行中に育児に励む？ 著者